

講談社版現代語訳今昔物語・長野尊一 装画・村上

今昔物語

(下)

長野 嘗一

現代語訳



講談社



今昔物語（下）

昭和 42 年 11 月 28 日第 1 刷発行

定価 520 円

検印
廃止

訳者 長野 省 一

発行者 野間 省 一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽 2-12-21

電話 東京 (03)942-1111

振替 東京 3 9 3 0

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 株式会社 大進堂

©Joichi Nagano

Printed in Japan

（落丁本・乱丁本はおとりかえします）

凡 例

一、今昔物語は説話文学の最高峰であり、短篇小説の宝庫でもある。平安時代の庶民がどう生きたか、その脚音^{くしおと}がさながらに録音されている。源氏物語には貴族の生活、しかも恋愛生活だけしか描かれていないが、それとは全く異なる裏町の人生がここには展開されている。われわれの祖先が、米塩を得るためにどのように働き、盗人の害をのがれるためにはどのように苦労したか、女性には暴漢の襲撃からどのようにして肌^{はだ}を守ったか、などの人生縮図がここには描かれているのである。だからこの物語の中では、遠い雲の上の存在でしかなかった王朝人が、すぐ隣の家に住んでいるような親近感をおぼえるのだ。古典とは遠いものだという通念を、これは物の見事に破碎してくれる。

訳者はすでに二回、この物語の抄訳を試みているが、今回三たび筆を新たにその訳出を試みた。依然とし

て抄訳ではあるが、訳出した作品の数はこれが最も多い。

採用した作品は総数二三七篇、これは千有余に及ぶ今昔全篇のわずかに二四パーセントにすぎない。しかし、いやしくも傑作佳篇と思われるものは、ことごとく採用することができた。「今昔物語」には、こういう秀作もある代わりに、駄作凡作も多いからである。これによって、この傑れた古典の輪郭にだけは十分触れることができる^とと自負している。

一、この二三七篇を二冊に分けて、それぞれに「通し番号」をつけ、題名は訳者の考案によって付した。原典にはもっと長い題名がついているが、やや冗漫で、それがため読書意欲を減殺される怖れのあることをおもなばかり、内容と矛盾しない範囲において、現代風な題名にあらためた。原題は各話の末尾に記しておいた。

一、「今昔物語」は「おもしろい」という点では日本古典随一であろう。古典とはありがたく敬重すべきものには違いないが、おもしろくはないと考えていたわれわれの常識を、それは物の見事に打ち破ってくれる。しかし仏教に関する説話、なかんずく「天竺・震旦の部」のそれは、仏教の信仰が薄れた現在、とくに若い読者層を考え

て（下）にまわし、まず「本朝、世俗の部」から刊行することにした。

一、訳文は、なるべく忠実な訳であって、しかも現代文としての生気を失わぬよう配慮したが、「今昔物語」の性質上、全く原文に忠実であるとはいいがたい。文の順序を入れ替えたり、句読の切りかたを変えたり、読者の理解に便ならしめんがために多少の補筆を行なったりした個所がある。「省筆」はなるべく避けたが、ただ一つ、古典に特有のあまりにおびたらしい「敬語」は、今日の常識にしたがってかなり節約した。とにかく、原文の手足を生かすよりも、その心臓を生かすよう心がけた。

一、底本には芳賀矢一博士の「致証今昔物語集」三冊及びそれをもととした「朝日古典全書本」六冊を用い、他の諸本を参照した。なかんずく、「日本古典文学大系」（岩波書店）から、大きな裨益を受けた。

一、なお、詳細な解説は本巻巻末を参照されたい。

目次

△天竺▽

3 目次

一	悉達太子	9	一三	蛇の子に牛乳	45
二	滿負長者	14	一四	断金の契り	47
三	牛乳	18	一五	孝女の徳	48
四	香身仏	19	一六	僧迦羅國由來	51
五	樹提伽長者	22	一七	獅子の子	57
六	竜王の智	25	一八	夜光玉	60
七	金剛醜女	30	一九	一角仙人	64
八	盲人開眼	33	二〇	鹿母夫人	69
九	地獄	36	二一	兔身を焼く	73
一〇	愛欲	37	二二	獅子と猿	75
一一	三宝、鬼神を感じしむ	40	二三	九色の鹿	77
一二	隱形の藥	44	二四	亀と人と	81
			二五	百獸の王	86
			二六	鶴と亀	88
			二七	猿の肝	91

二八 象の知恵

二九 棄老国きろうこく

△ 震旦 △

三〇 玄奘三蔵げんじょう

三一 この母にしてこの子あり

三二 羊になった娘

三三 伯奇、鳴鳥となる

三四 眉間尺みけんじやく

三五 孝子

三六 天の河の使い

三七 王照君

三八 上陽人

三九 流詩に結ばれた恋

四〇 孔子と童子

四一 孔子と老翁

93

95

99

106

108

110

113

114

114

117

119

121

123

126

四二 後の千金

四三 死生は賢愚によらず

四四 莊子

四五 孔子と盜跖とうせき

四六 岩に立つ矢

四七 貞女

四八 女心は文より富貴

四九 卞和の玉べんか五〇 瓶子の首へいじ

五一 賢い盗人

五二 神よりも人

五三 邪淫

五四 石工の和恵

五五 卒都婆の血そとば

△ 本朝（仏法篇）△

128

129

130

132

135

136

137

140

141

144

149

152

156

158

五六	久米の仙人
五七	尼の持仏
五八	書生と鬼
五九	道命阿闍梨 どうみょうあざり
六〇	煩悩 ぼんごう
六一	慈悲深き僧
六二	道祖神 さめのかみ
六三	道成寺
六四	女狐の死
六五	きりぎりす
六六	橘敏行 たちばなとしゆき
六七	智と舅 ち しゆうと
六八	いどみ心
六九	濟源僧都 さいげんそうず
七〇	僧都の母

196 194 192 190 184 183 181 177 174 173 171 168 165 164 161

七一	成合観音 なりあひ
七二	鷹取りの男 たか
七三	敦賀の女 つるが
七四	南無銅鉄万貫好女多得 なむ ばんがんとうにやたさく
七五	竜宮城
七六	蟹と蛇 かにへび
七七	狐の夫 きつね
七八	夫婦受難
七九	盗人の妻
八〇	わらしべ長者
八一	隠形者 おんぎようおとこ
八二	運
八三	乞食の智 こじき
八四	双六氣違 ふしろく
八五	菩薩の方便

249 247 245 242 239 235 229 224 220 217 212 211 206 203 199

八六	稚児 ちご
八七	吉祥天女
八八	大江定基 おねのさだもと
八九	狂信
九〇	満仲出家
九一	六の宮の姫宮
九二	鴨
九三	鷹使いの夢
九四	宗正 むねただ の出家
九五	悪人往生
九六	后と聖人
九七	師弟
九八	母か子か
九九	達知門 たうちもん の捨児
一〇〇	天狗

303 299 298 296 292 287 285 281 280 274 268 264 262 260 256

解説

一〇一	染殿 きよどの の後
一〇二	外術 げじゆつ を習う男
一〇三	信濃路の怪
一〇四	天狗と竜
一〇五	聖者と智者
一〇六	体と魂
一〇七	冥途の使いも金次第
一〇八	母を殺す男
一〇九	祈りに増る祈り

今昔物語

天竺

震旦

本朝（仏法篇）

美
術
·
精
上
畫

一 悉達太子

今は昔、天竺（印度）の淨飯王の皇子に悉達太子という方がおわした。太子の年が十七歳になったので、父の大王は諸大臣を集めて議られるよう、

「太子はすでに成年に達せられた。今は妃を奉るべしと存するが、理想にかなった妃の候補者はおらぬか。そちたち、思い寄りの人あらば申してみよ。」

このとき一人の大臣がうやうやしく答えていう。

「申し上げます。釈迦の御一族に一人の婆羅門がございます。名を摩訶那摩と申します。彼の娘に耶輸陀羅という女子がございますが、容貌も頭腦も人にすぐれ、皇太子様の御妃としての資格は十分かと存じます。」

大王はよき妃の候補者が見つかったと大喜び、さっそくかの婆羅門のもとへ使者をつかわした。

「太子はすでに成年に達したによって、妃を求めておるが、汝の娘に白羽の矢を立てた。謹しんでお受けいたせ。」

使者によって伝えられたこの大王の仰せを、父の婆羅門は恐懼して承諾した。

されば大王は諸大臣とともに吉日を選び、車万輛をつかわして妃を迎えることにした。妃の車はすでに王城に入り、太子は世の常の人のごとく婚姻の礼をあげた。侍女には美女麗人の限りを選びととのえ、夜となく昼となく遊樂を事とせしめた。だが、太子はつねに妃と坐臥をともにしない。いったいにこの太子はまだ物ごころもつかぬうちから、夜は心を静め思いを乱さずして、もっぱら聖僧の道を觀じ給うというふうであった。大王は毎日お附きの侍女たちに、「どうじゃ。太子は妃と睦み給うておるか」と聞く。侍女たちは、「いいえ、皇太子様がお妃様とお睦みになつておられます所は、まだ一度も拝見したことがございませぬ」と答える。聞いて大王は大いに歎き、いよいよ美しい女たちの歌舞を加えて、太子の心を樂しませようとされる。ところがその効果もなく、皇太子は依然として妃と睦み合おうとしない。もしや不能なのではあるまいか。そうも邪推してみる大王の面上には、えもいわぬ憂色があった。

園の花が笑み榮え、泉の水が清く涼しい季節になった。それを聞いて太子は、園へ出て遊ぼうと思ひ立ち、侍女を

してそのよしを父大王に申ししめた。

「こうして宮殿におりますと、遊ぶこともなく、いたずらに日が永くのみ感じられます。しばらく外へ出て清遊を楽しみたいと思います。」

太子の申し出に、大王は初めて喜びの眉を開き、さっそく大臣百官に仰せて道路を作り、四辺を清掃させた。太子はまず父王のおんもとへ赴いて王を拝し、しかる後外出の用意をされる。大王は年とった大臣で学問も分別もあるものを太子の供につけてやる。こうして太子はもろもろの眷属を従えて、都城の東門から出て行かれる。国中の貴賤男女は雲集してこれを見送るのであった。

時に淨居天の神が老翁の姿と変じて一行の前に現われた。頭髮は白く、背中はせむしのように曲がり、それが杖によりかかって疲れた歩みを運んでくる。これを見た太子はさっそくお供の人々に問う。

「あれはなんだ。」

「はい、あれは老人と申すものでございます。」

「その老人とはいかなる人というのか。」

「はい、この人も昔は若く盛りでございました。なれども今は年をとり、姿形があのようになつてしまいました。それを老人と申します。」

「うむ。ではもう一つ聞くが、ただこの人だけが老人になつたのか。それともよろずの人がみなそうなるのか。」

「よろずの人がみなそうなるのでございます。」

宮廷にみにくい老人はいない。太子は新しい見聞を得、車をめぐらして宮殿に帰られた。

数日の後、太子はまた父の大王に、前のごとく都城を出て遊びたいと願ひ出た。大王の歎きはいいよ深い。

「太子はさきの外出に際し、道に老人の姿を見た。爾来憂いの色のみあつて、世を楽しむ心がない。今また外出したら、ろくなことがあるまい。」

いったんはこうして禁じたものの、やがて諸大臣を集めて議られるよう、

「太子はさきに都城の東門より出て、老人を見て心樂しなぬ風情であつた。しかるに今また外出したいと申しておる。よつてこのたびは道を先払いして、さきの老人のごとく醜い輩は眼につかぬようにしておくがよい。」

そう命じて、太子の外出を許可された。

太子は前のように百官を率い、都城の今度は南門から出る。

時に淨居天の神は病人に姿を変え、一行の前に現われた。身は瘦せ疲れ、腹だけが大きくふくれ上がり、息もた

えだえにうめいている。これを見た太子は、またお供の人たちに聞く。

「これはなんだ。」

「はい、これは病人と申すものでございます。」

「病人とはいかなるものをいうのか。」

「はい、病人と申すは嗜欲にふけて飲食いたしますが癒ることなく、地水火風の四大元素は調和を失い、それが転じて身の節々が苦しみ痛むようになります。気力は消耗し、眠り臥しても安眠が得られず、手足はあっても自分でそれを動かすことがならず、起き臥するにもいぢいぢ他人の力を借りなければなりません。それを病人と申しまする。」

この説明を聞き、かの病者の様を見ると、太子の慈悲の心はおのずから悲しみに閉ざされた。

「ではもう一つ聞くが、この人だけがこのような病にかかるのか。それとも余の人もみなかかるのか。」

「はい、いっさいの人が貴賤をえらばず病いにかかるのでございます。」

太子はまた一つ新しい見聞を得、車をめぐらして宮殿に帰られたが、ひとえにこのことを悲しんで、楽しみの心を失われた。

太子の帰ったのを見て、父大王はお供の人々に聞く。

「どうじゃ。太子はこのたびの外出でなんぞ楽しいことがあったか。」

「いいえ、このたびは南門から出られましたが、道に病人を見て、これを問い聞かれまして、いよいよ御不快の御模様でございます。」

大王はまた一つ歎きが加わった。以後は太子の外出を恐れ、ひたすらその心をなぐさめるのに心をくだき給うのであった。

ときに憂陀夷といって、一人の婆羅門の子があった。知恵聡明で弁舌の才もあった。この人を大王は宮中に招き入れて、太子のことを懇々と依頼される。

「太子はいま人間の五欲を受けることをどうしても楽しまない。久しからずして王宮を出奔し、かの聖僧の道とやらを学ぼうになりはせぬかと、それをわたしは恐れておる。汝すみやかに太子の朋友となり、世間の五欲の楽しさを語り聞かせて、出家の心をとめるようにいたせ。若い太子にはこの父の忠告より、若い友人の忠告が一番よい。」

憂陀夷は王の仰せを畏み、爾来太子の身邊を離れず、つねに歌舞を奏してお見せ申した。数日後、太子はまた外出して遊びたいと父王に申し出た。父王は考える——このた

びはかの憂陀夷が太子の朋友となつてつき随つておる。されば世間をいとい出家を好む太子の心も変じたであらう——そう考えた大王は太子の外出を許可された。太子は憂陀夷と百官を率い、香を焼き花を散らし、もろもろの伎樂を奏しつつ、都城の今度は西門から出て行かれる。

それを見て淨居天の神は考える——さきに自分は老・病・二つの姿を現したが、衆人こそつてこれを見て王に申し上げた。されば王は、これを見た太子が楽しみ給わぬによつて、大きく腹を立てられた。こたびは死の姿を現じようと思ふが、もし供の者がみなこれを見て王に申し上げたなら、王は怒りを増してかの者どもを罰するであらう。それはかわいそうなことゆえ、今日はひとつ、ただ太子と憂陀夷との二人にだけ姿を見せて、余の人の眼には見えぬようにしてやろう——そう考えた彼は、たちまち死人の姿に変化した。その死人を輿に乗せ、香や華をその上に散らせる。人々は泣き合つてこの葬列を見送る。そういう演出である。これが太子と憂陀夷二人の眼にだけ映るのだ。太子は憂陀夷に問う。

「これは何人だ。」

「……………」

憂陀夷は大王の仰せを怖れて答えない。二度、三度と太

子がたずねたが、どうしても答えない。

ここに淨居天の神は神通力によつて、憂陀夷の心を無意識不覺の状態になした。分別を失つた憂陀夷は答える。

「これは死人でございます。」

「死人とはいかなるものをいうのか。」

「はい、死とは、利刃のごとき風が人の形を解き、魂が身を去り、地水火風四大元素の根元が統制を失うことを申します。この人は世にあるとき五欲に貪着し、財宝を愛惜して、一向に無常を悟らなかつたものでございます。今このように死を得れば、五欲財宝はもとより、父母・親戚・眷属といえども、つき従つてともに行くことはなりません。それ、お庭の草木のごとしといったらよいでしょうか。さればこのように死ぬるものは、まことに哀れむべきでございます。」

この説明を聞いた太子の面色には畏怖の色さえうかがわれた。

「ではもう一つ聞くが、ただこの人だけが死ぬるのか。それとも余の人も同じく死ぬるのか。」

「人はみな一度は死ぬるものでございます。」

太子は三たび、新しい見聞を重ね、車をめぐらして王宮に歸られた。

大王はさっそく憂陀夷を召して問われる。

「どうじゃ。太子は外出して楽しそうであつたか。」

「いいえ、都城を出て遠からぬうちに、道に死人に会いました。いずれの所から来たものとも知れませぬ。それがしかも、太子と私と二人の眼にだけ見えまして。」

大王は考える——太子と憂陀夷との二人だけが見て、爾余の人には見えなかつたという。してみればこれは定めし天の神のなすわざであろう。諸臣の落度ではない。かの人相見の婆羅門が予言したとおりである——大王の悲歎はますます深く、日々人をつかわして太子の心を引き止めようと、なだめつすかしつするのであつた。「この国はみな汝のものだ。それをどうして汝はそう憂えてばかりいて、楽しみという楽しみを毛嫌ひするのか」さらに大王は群臣に言いつける。

「太子はさきに東・南・西の三門より外出したが、まだ北門が残つておる。こたびは必ず北門から外出いたすであらう。さればそれに通ずる道を美しく飾り、前々のごとき醜い輩が眼につかぬようにいたせ。」

そうして心のうちではひそかに願をかけられる。「太子がもし都城の門を出ましたなら、天にましますもろもろの神よ、願わくば不吉なことを現じて太子の心を憂え悩ます

ことなかれ。」

太子はまた父王に、外出して遊びたいと願ひ出た。王は憂陀夷や百官を太子の前後に扈從させた。このたびは都城の北門を出て園に至り、太子は馬より下りて樹下に端坐し、お供の多くの人を退けてただ一人、心を一にして世間の老・病・死の苦しみを思惟し給うのであつた。

そのとき、淨居天の神は僧の形に変化して、僧衣をととのえ、鉢を持ち、錫杖を手に取つて、太子の前に現われた。太子は問う。

「汝は誰か。」

「私は比丘でございます。」

「比丘とはいかなるものか。」

「煩惱を断つて、後生に惡身を受けぬものを比丘と申します。世間はことごとく無常ですが、われらの学ぶところは煩惱をはなれた正道でございます。眼は色にめです、耳は声におどろかず、鼻は香におもねらず、舌は味にふけらず、膚は触にしたがわず、心は法に迷わず、永く無為を得て解脱の境に至っております。」

言い終えたかと思うと、僧は神通を現じて虚空に昇つて去つた。太子はまた新しい見聞をかさね、馬に乗つて宮殿に帰られた。

王はさっそく憂陀夷に問う。

「どうじゃ。太子このたびの外出ではなんぞ楽しいことがあったかの。」

「はい、こたびは道に不吉で醜いものはありませんでした。ただ園の中に至り樹下に坐されましたとき、一人の奇妙な人がまいました。髪を剃り衣は黒く染めた人でございます。御前で太子様と語り、問答が終わるや空に昇って去りました。何事を語られたか私には分かりかねますが、この人と話しておられたときの太子様のお顔は、歓喜に輝いて見えました。王宮に帰られました後は、またものと憂いの深いお顔に戻りました。」

憂陀夷のこの報告を聞いても、大王にはなんの瑞相さいさうも分かりかねた。ただ太子はそのうち王宮を出て聖僧の道を学ぶであろうと疑って、いよいよ恐れ歎き給うたと、語り伝えたことである。

(巻一・第三 悉達太子城に在りて樂しびを受くる物語)

注

一 釈迦とは元來種族の名。悉達太子の父母淨飯王や摩耶夫人は、ともに印度四姓の随一たる刹帝利種に属し、釈迦族の裔である。

二 古代印度四姓の最高位で、僧侶階級をさす。

三 五淨居天に住む神。五淨居天とは、無煩・無熱・善見・善現・色究竟の五天をいい、不還果の人の生すべき色界四禪九天の上五天をさす。

四 人間の持つ五種の欲望、すなわち色・声・香・味・触の五つ。

五 この話は巻一の第一話に見える。すなわち善相婆羅門は摩耶夫人の胎に宿った太子を相して、「この夫人の胎の中の御子は必ず光を現せる釈迦の種族である。胎を出て給う時は大いに光明を放つであらう。梵天・帝釈及び諸天がみな恭敬するであらう。この相は必ず仏になるべき瑞相を現するのだ。もし出家にあらずば、転輪聖王として四天下に七宝を満たし、千の子を具足するであらう」といったよしがみえる。

二 満財長者

今は昔、天竺てんしゆく(印度)に満財長者という大金持ちがあつて、一人の息子こゝろこを持っていた。また、須達長者という金持